

「おさしづ」第5巻における本席身上願と「道」

『おさしづ改修版』第5巻(明治33～34年)の本席身上願における「道」の用例を整理する。第5巻には本席身上願の「おさしづ」が9件ある。そのうち、「道」が用いられるのは8件、3回以上「道」が繰り返し用いられるのは6件である。

刻限と本席身上願

本席身上願は刻限の「おさしづ」とほぼ同様の位置を占めるものと考えられているが、第5巻の本席身上願の割書きをみると、その意味合いがよく分かる。たとえば、明治33年10月14日の「おさしづ」割書きには次のように記されている。

本席御上一昨日の午後四時頃より俄かに発熱し、本部員一同集会の上親神様へ御願を掛け、その願には御身上速やかお成り下され次第、御障りの事第一に御願い申し、さしづ通り運ばして貰いますと願、尚本局より電報の事情ありますから、この間御障りの事御願い申し上げますと願

このように、この「おさしづ」は本席の身上平癒を願うため、指図通り事を運ぶという本部員一同の誓いのもとに伺われている。同じようなことは、(さ33・3・21、33・9・14、34・6・14)の割書きにも記されており、本席身上願の意味合いの重さが分かる。また、第4巻から、「用いるものがないから刻限論しにくい」という趣旨の言葉が何度かあることから、むしろ当時の人々にとって刻限よりも本席身上願のほうが差し迫ったものとして受け取られていたのではないかとも思われる。

天然の道

本席身上願の内容は、刻限と似たような文脈で説かれることが多い。第5巻では一派独立請願との関連で次のように説かれている。

「又候一つ同じように一つ別派という、独立という、小さいものが先という。この道というは、どうと皆思う。心はころりと違^{たが}違^{たが}う。そこで、どうでもこうでも天然と言うたる。天然の道には急いたて行くものやない。天然は道理で出来たもの。あちらへ頼みこちらへ頼み、それは代を以て代物買い寄せるようなもの。代を以て買い寄せるは仮名なもの。この道始め掛けたは、なかへ容易で出来たものやない。何も知らん者寄って、高い低いは言わず渡りた。そこで、じっくり溜めて置けば天然という。天然はふしある。天然というはふしから理治まる。これは天然と言う。急いては行くものやない。急えたと行けやせん。一足に跨^{また}げる事出来ん。そら行けやせん。踏み台無くばいかん。どちらへなりと跨げようと言うは世情という。まあ、これから聞き分け。成っても成らんでも構わん。掛かりは年相当の者寄り合うて天然の道を楽しんで居る。一代はどうでも苦しみ通ってくれるは、神の楽しみ。連れて通る道ある。」(さ33・9・14 本席身上願(本席御身上夏頃より少々御障り有之、……夜前御身上御障りに付本日より揃うて願))

この頃、第1回一派独立の請願に追加添付するために、『天理教教規』、『天理教教典』、『御神楽歌積義』などの教義、組織に関する書物が編纂されていた。この「おさしづ」では、「この道」にとって独立というのは小さいものであり、「成っても成らなくても構わん」と言われている。そして、大事なことは、「この道」

の始めかけに、「何も知らん者寄って、高い低いは言わず渡りた」ように、何か人間思案から思惑を立て一足跨ぎに切り抜けようとするのではなく、苦しいなかもじっくりと神にもたれて通ることを促される。そうすれば、神がだんだんと連れて通ると論される。こうした道の歩み方を「天然の道」という言葉で教えられている。

道の上の土台／順序の道

当時には、「天理教ほんに偉いものや」(さ34・5・25)と世間から認識されるようになってきていた。「おさしづ」ではその土台はどこにあるかを忘れぬようにと強調されている。

「道の上の土台据えたる事分からんか。長い間の艱難の道を忘れて了うようではならん。土台々々分からず、土台に理無くば、何時どういう事にいずんで了わにゃならんやら分からん。世界大恩忘れ小恩送る、というような事ではどうもならん。この順序早く聞き取って、心にさんげ、理のさんげ、心改めて、ほんにそうであったなあ、と順序の道を立ったら、日々理を榮える。」(さ34・2・4 本席先日より御身上御障りに付、……本日願／押して、平野より教校地所買入れの事に付申し上げます)

このようにこの道の土台には、長い間の艱難の道があると言われる。先の引用の「おさしづ」(さ33・9・14)にも「この道始め掛けたは、なかへ容易で出来たものやない」とあり、長い間、教祖によって艱難のなかを通過して始められた道があつて、いまの姿がある。こうした順序をたてて何事も判断するように説かれている。

そのようにして通る道は、具体的にどのような姿であろうか。

「これもさあへ道をつけるは皆の楽しみ。指五つに加わりてくれ。」(さ33・9・14)

「何も遠慮気兼は要らん。高い低いはありやせん。道という、一つである。一つからの理なら、十人なら十人知ってるは道なれど、十人の中に三人くらい知ってるというは、神の道ではない。」(さ33・10・14)

指五つに加わるというのは、皆がつながりあうということである。そこには遠慮はいらず、高い低いもない。皆が一つに結び合つて通るのがこの道のあり方であるとされる。その際、優しい言葉が非常に大事であると教えられる。

「皆来る者優しい言葉掛けてくれ。道には言葉掛けてくれば、第一々々やしきには優しい言葉第一。何も知らん者、道はこんなものかと思てはならん。年取れたる又若き者も言葉第一。愛想という事、又一つやしきに愛想無うては、道とは言わん。男という女という男女に限り無い。言葉は道の肥、言葉たんのうは道の肥。」(さ34・6・14 六月一日より本席御身障りに付……如何の事でありますや願／二間半に両庇、四畳半と六畳とに押入付のものを並べてさして貰います、と願)

このように、「この道」(神の道)の土台が説かれ、皆がその元に根差すお互いとして言葉を掛け合い、一つに結び合つて、教祖によって付けられてきた道に真実を尽くす歩みを進めるように論されている。